

## 第1章 総論

### 探究的学習を通じた、グローバル社会に生きてはたらく資質・能力の育成 －教科の見方・考え方を生徒が活用できる、深い学びの提案－

井上 哲志

#### 本論の要旨

グローバル化、技術革新、社会構造などが目まぐるしく変化する現代社会において、今の子供たちは、どうすれば社会が持続可能な発展を遂げるのかという問いに直面し続けなければならないことが予想される。

そのような状況において、グローバルな人材たる力を身に付けることは、これからの社会の担い手である子供たちにとって必要な力であることから、グローバルな視点での探究的学習活動を構築し、ローカルな学習とグローバルな学習を関連付けることで、郷土を愛する態度の育成につなげていきたい。

そのために、まずは「グローバル社会に生きてはたらく力」を、学校教育目標を意識しながら定義する。次に、各教科においては、「定義」に基づいて、グローバル社会に生きてはたらく力に資する教科の見方・考え方を子供たちが身につけられるような授業の開発に取り組む。子供たちが各教科で身につけた「見方・考え方」をはたらかせて他の教科や「BT」に取り組めるような、カリキュラムの構築を図る。「BT」においては、SDGs を意識したルーブリックを作成し、「ローカル」と「グローバル」を結ぶ学びを促す。

これらの研究については、本校が継続して取り組んできた手法である、「問い」から始まる学習活動を意識することや、ICTや思考ツールの活用、意見交流、論述等の表現を教科横断型で効果的に設定することなどを通して達成していく。

**キーワード** グローバル社会、探究的学習、カリキュラム・マネジメント、知識の概念的な理解

#### はじめに

本校では、昨年度まで、文部科学省の「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」の助成を受け、「探究的学習活動を通じた、実社会に生きてはたらく力の育成」を主題に実践開発を進めてきた。

本稿では、長年本校が「総合的な学習の時間」に取り組んできた「BIWAKO TIME」（以下、「BT」）にみられる課題をまず挙げる。次に、実践開発にあたって、本年度どのような改善を進めてきたのかを述べる。最後に、本研究にかかわる課題と、今後の方向性を記すものとする。

なお、「総合的な学習の時間」の中にある「BT」、「情報の時間」それぞれに関する本年度の運用の実際の詳述、またはその成果と課題についての考察は、本研究紀要に所収の各論考に譲ることとする。

#### 1. 問題の所在

##### (1) 今、求められている力とは何か

近年、急速に進行しているグローバル化社会において、他国との相互依存関係はますます複雑に深化してきており、この現状に対する理解の促進や、異なる価値観・環境に対する適応力・対応力をもったグローバル人材の育成が我が国にとって喫緊の課題であるとされている。

このことを受けて、世界各国においては「キーコンピテンシー」や「21世紀スキル」といった新しい能力概念が提唱され、教育界や経済界を中心に積極的な議論が行われており、我が国においてもグローバル化時代に求められる能力として「社会人基礎力」や「学士力」といった新たな能力概念が検討されている。<sup>1)</sup>

令和3年度から全面实施となる新学習指導要領では、このような状況を「社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代」とし、「学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている」ことを指摘している。<sup>2)</sup>

このように、グローバル化、技術革新、社会構造などが目まぐるしく変化する現代社会において、今の子供たちは、どうすれば社会が持続可能な発展を遂げるのかという問いに直面し続けなければならないことが予想される。

本校では、この問いに対して、生徒が探究的な学習過程で学んだ教科の見方・考え方を生かし、協働的に課題解決する力を身に付けさせることのできる

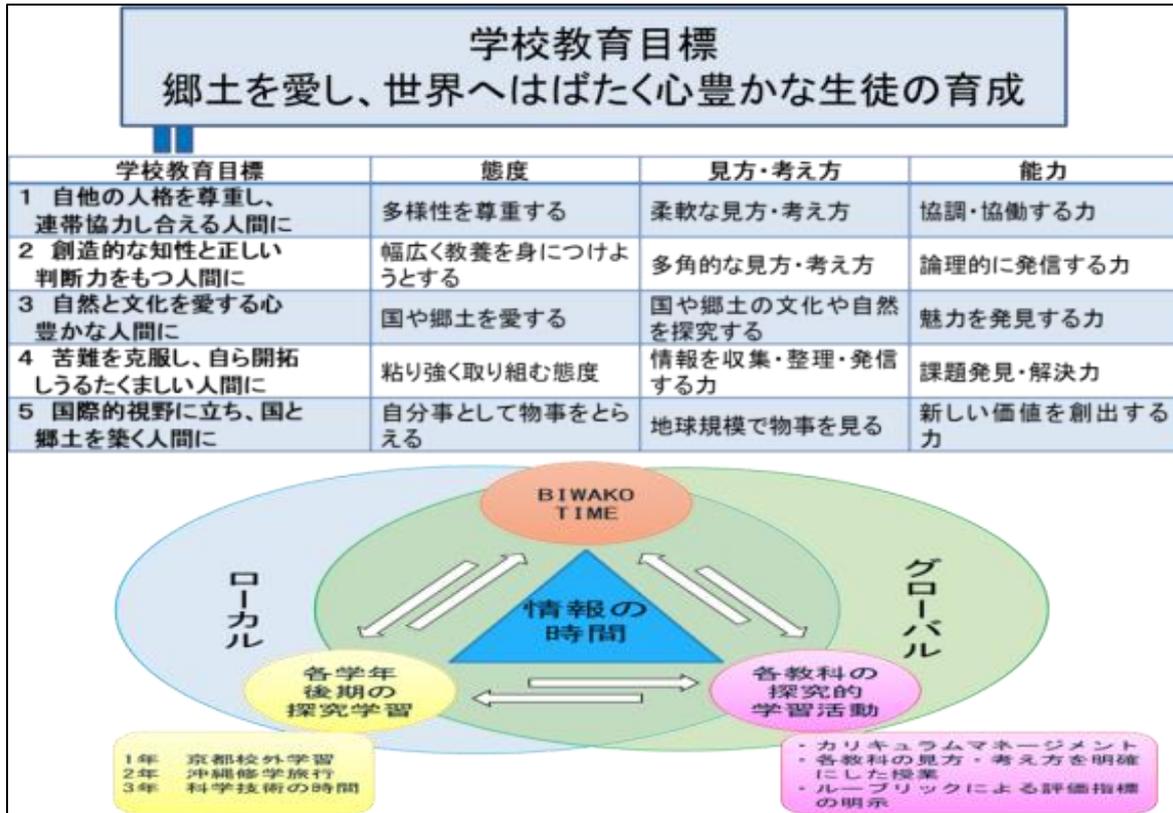


図1 令和2年度 校内研究の概念図

ように、授業や教育課程を改善することが必要だと考えている。

### (2) 本校研究の経緯と現状から

これまで本校では、論理的思考を促す学習のあり方を研究の柱に据えながら、思考ツールを授業に取り入れることで生徒の学びを支えてきた。また、総合学習「BT」を軸に、探究的な学習を通して主体的・対話的で深い学びに迫ったり、生徒の学びと実社会に生きてはたらく力を結ぶことを目標にした授業改善に取り組んだりしてきた。

とりわけ平成28年(2016年)度より、本校では「BT」における探究的学習活動を幹として、各教科で横断的に探究的学習活動を意識して取り組むことで、課題解決に向けた新たな視点や方策を導く指導を効果的に行って、論理的・創造的に思考・判断・表現するスキルの向上を目指してきた。各教科の学習では、思考ツールや論述、グループ学習、ICTなどを活用して論理的思考力を高め、課題を見つめたり、よりよい課題解決に向けて行動しようとしたりするスキルや態度を養ってきた。

しかしながら、かつての附中生に比べると、郷土を愛する態度や社会問題に対して情熱を持って取り組んでいる割合は低いことが指摘されている。<sup>3)</sup>

また、郷土学習の特色はよく出ているが、グローバルな広がりへの志向を持つ研究を促すような指導

はしてこなかったという反省が校内研究会では出された。

グローバル化の急速な進行という現状と、「BT」の課題を合わせると、ローカルな課題とグローバルな課題とを結びつけるような、調査研究の広がりを持たせることが必要ではないかと考えた。

### (3) 我が国の教育をめぐる現状

平成14年(2002年)の学習指導要領で「総合的な学習の時間」が導入され、その内容例として国際理解教育が明記された。

さらに、文部科学省は、異文化理解・交流にとどまっていた国際理解教育から、「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育」と定義される「国際教育」へ、という方向性を打ち出し、国際教育を、2002年度学習指導要領の基本理念である「生きる力」をはぐくむことに直接つながるものと位置付けた。

一方、国際教育の課題としては、「一部の教員任せになっており学校全体の取組になっていない傾向」や「英語活動の実施すなわち国際理解という誤解、単なる体験や交流活動に終始など、国際教育の内容的希薄化、矮小化への懸念」を挙げている。<sup>4)</sup>

本校の、探究的な学習過程で学んだ教科の見方・考え方を生かし、協働的に問題解決するという学習

指導の枠組みに、グローバルな文脈を組み込むことや、育成する資質・能力をグローバル社会に生きてはたらくそれに設定することは、教科の授業を通して、全教員で取り組むために必要なことであると考えた。

## 2. 研究の構想

### (1) 基本方針

グローバルな人材たる力を身に付けることは、これからの社会の担い手である子供たちにとって必要な力であることから、グローバルな視点での探究的学習活動を構築し、ローカルな学習とグローバルな学習を関連付けることで、郷土を愛する態度の育成につなげていきたい。

そのために、まずは「グローバル社会に生きてはたらく資質・能力」を、学校教育目標を意識しながら定義する。次に、各教科においては、「定義」に基づいて、グローバル社会に生きてはたらく力に資する教科の見方・考え方を子供たちが身に付けられるような授業の開発に取り組む。子供たちが各教科で身に付けた「見方・考え方」をはたらかせて他の教科や「BT」に取り組めるような、カリキュラムの構築を図る。「BT」においては、SDGsを意識したルーブリックを作成し、「ローカル」と「グローバル」を結ぶ学びを促す。

また、BTにおけるSDGsのように、各教科においてもグローバルな文脈を意識しながら生徒が学習に取り組めるように、教材等の開発・工夫に取り組む。

これらの研究については、本校が継続して取り組んできた手法である、「問い」から始まる学習活動を意識することや、ICTや思考ツールの活用、意見交流、論述等の表現を教科横断型で効果的に設定することなどを通して達成していく。

### (2) グローバル社会に生きてはたらく資質・能力

前述の通り、本年度の研究を進めるにあたり、「グローバル社会に生きてはたらく資質・能力」と題する、本校ならではの新しい能力概念を定義する必要があると考えた。

そこで、校内研究会でまずは「グローバル社会に生きてはたらく資質・能力とは何か」について議論した。

カリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）を行うことや、「本校らしい」教育の創造を念頭に置いた場合、本校において育成すべき「資質・能力」は、学校教育目標と関連付いていなければならないと考え、学校教育目標の項目別に関連づけ、分類し

た。分類する中で、共通点に着目し、「態度」に類するもの、「見方・考え方」に準じるもの、「能力」を示すものの三つに分けて示すこととした。（表1）

表1 学校教育目標に基づいたグローバル社会に生きてはたらく15の資質・能力

学校教育目標	態度	見方・考え方	能力
1 自他の人格を尊重し、連帯協力し合える人間に	多様性を尊重する	柔軟な見方・考え方	協調・協働する力
2 創造的な知性と正しい判断力をもつ人間に	幅広く教養を身につけようとする	多角的な見方・考え方	論理的に発信する力
3 自然と文化を愛する心豊かな人間に	国や郷土を愛する	国や郷土の文化や自然を探究する	魅力を発見する力
4 苦難を克服し、自ら開拓しうるたくましい人間に	粘り強く取り組む態度	情報を収集・整理・発信する力	課題発見・解決力
5 国際的視野に立ち、国と郷土を築く人間に	自分事として物事をとらえる	地球規模で物事を見る	新しい価値を創出する力

これは、学習単元を考案する際に、どのような「資質・能力」を育成するのかという、授業の目的を明確に示すものである。

### (2) カリキュラム・マネジメント（カリマネ）

#### ① 昨年度までのカリマネ

各教科や総合学習で学んだ知識が関連づけられ、理解が深まるためには、各教科で単元内容を把握する必要がある。総合学習や各教科での学習内容を把握し、各授業において生徒たちの深い学びにつながるように、単元配列表を作成した。

単元配列表では、総合学習を中央に置き、各教科の単元との関連を意識しながら、総合学習において発揮させたい力、身に付けたい力を意識しながら、教科担当者と協議した。特に、「BT」での探究的プロセスに合わせて「情報の時間」や各教科における探究的要素を整理した。<sup>5)</sup>

#### ② 本年度のカリマネ

二年生後期のカリマネ例（表2）のように、トピックで単元をつなぐカリマネは、生徒にも教師にもそのつながりは見えやすい。

しかし一方で、育成すべき資質・能力でマネジメントされているわけではないので、取り上げられるトピックについて詳しくなるにしても、共通の資質・能力が育つわけではない。むしろ、修学旅行の準備学習のように、短期に集中してトピックを学ばせるのが目的であれば、差し支えなかるうが、年間を通じて生徒の学びをマネジメントするならば、資質・能力に注目してカリマネに取り組む必要があるのではないかと考えた。

そこで、本年度は、開かれた教育課程であること、育成すべき「15の資質・能力」を介して教科間もしくは単元間のつながりが可視化されることを目指して、単元配列表の作成に取り組んだ。

表2 2年後期学年探究にかかわるカリマネ

学期	月	教科	単元内容
10月	英語	アニメ映画「ひめゆりの塔」を視聴し、英語で自分の意見を書く。	
		社会	九州・沖縄地方の地理的事象について学び、「沖縄の訪問地は、自然環境からみて、どんな特徴があるだろう?」について論述する。
	保健体育	沖縄のエイサー「あしびな」について動画を視聴して学び、踊る。	
12月	音楽	琉球音楽を鑑賞し、その独特の音階や使われている音楽の音色を味わう。	
	美術	紅型を中心に、沖縄の伝統工芸が周りこどのような影響を受けて成立したのかについて、考察した。	
	家庭	琉球の衣食住について分担しタブレットで調べ、作成したレポートを掲示して交流する。	
1月	国語	今昔物語集の民話「わらしべ長者」について、モデルとなった原文と、絵本「わらしべ長者」(列島版)と「わらしべ王子」(沖縄版)を読み比べ、その違いは何か、考えを持つ。	
	社会	第2次世界大戦と沖縄戦について学び、「私の平和宣言」を作り、クラスごとにまとめてアブラチガマに献納する。	

表3 単元で育成したい資質・能力集計(1年)

1年			
態度	見方・考え方	能力	小計
多様性を尊重する	柔軟な見方・考え方	協調・協働する力	6
2	1	3	
幅広く教養を身に付けようとする	多角的な見方・考え方	論理的に発信する力	15
3	9	3	
国や郷土を愛する	国や郷土の文化や自然を探究する	魅力を発見する力	14
4	8	2	
粘り強く取り組む態度	情報を収集・整理・発信する力	課題発見・解決力	12
0	7	5	
自分事として物事を捉える	地球規模で物事を見る	新しい価値を創出する力	11
2	2	7	
11	27	20	58

まず、各教科がどの単元でどの「資質・能力」を育てるのか、単元配列表に直接書き込んだものを集約した。(図2)すると、各学年である程度の傾向が見えてきた。(表3)

この傾向に沿って、各学年で特に育成したい資質・能力を3~4つにしぼり、同じ資質・能力を育成することを旨とした単元は可能な範囲で、学習時期を近づけた。同時に、つながりのある単元の教科担当同士で、育成する資質・能力にどのように迫るのかということ进行交流し、共通理解を図った。(図3)

教科担当の異なる中学校において、育成すべき資質・能力にどのような教材で、どのような指導を通して迫るのかを共通理解することなしには、生徒が15の資質・能力を生きてはたらく力として身に付け

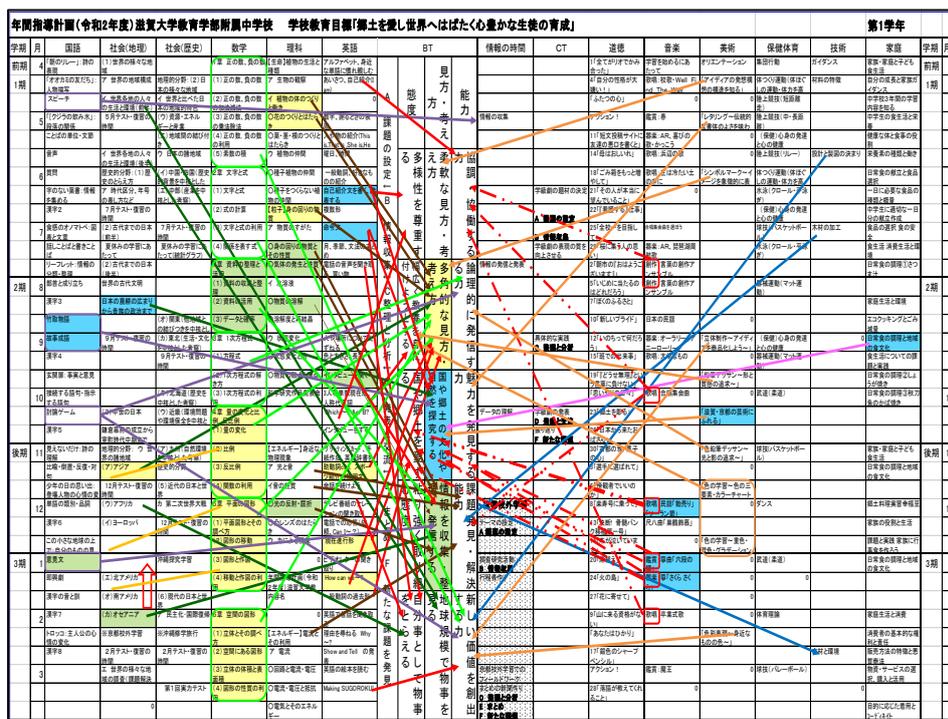


図2 育成したい資質・能力を記入した単元配列表(1年)



以下のとおりである。

表4 年間計画

回	月日	曜	内容	研究 授業 5校時	研究 授業 6校時
1	4/13	月	研究の方向性確認と各部から提案		
2	4/27	月	研究の方向性		
3	5/13	水	研究の方向性2・個人研究交流		
4	6/10	水	授業内容交流	国語 井上	理科 原田
5	6/24	水	授業内容交流・基調提案確認	国語 永田	保体 藤田
6	6/29	月	授業内容交流・提案内容協議	数学 山本	英語 宇田
7	7/21	火	授業内容交流・紀要案内発送作業	社会 七里	理科 澤
集	8/3	月	公開授業指導案確認・講演		
8	8/19	火	授業内容交流	社会 橋本	数学 山下
9	8/26	水	授業内容交流	英語 澤田	音楽 森
10	10/19	水	授業内容交流	保体 若宮	美術 西田
11	11/5	月	授業研究	技術 島田	英語 牧野
12	11/11	水	総合学習を語る会		
13	11/25	水	授業研究	国語 永田	社会 七里
14	1/18	月	授業研究・紀要執筆要項の確認	数学 山本	理科 原田
15	2/1	月	研究授業交流・人権研修・紀要執筆確認	道徳 宇田	道徳 西田
16	2/15	月	研究紀要執筆確認・研究総括・来年度に向けて1		

回	月日	曜	内容	研究 授業 5校時	研究 授業 6校時
17	3/1	月	授業研究・新年度の研究に向けて2	英語 澤田	保体 藤田

## (2) 知識の概念的な理解を目指した教育実践

本校では2016年度より、探究的な学習のあり方を研究してきた。

それは、本校の伝統であり、教育活動の軸でもあるBTが探究的な学びの時間であり、教科の学びと双方向的に作用させることで論理的・創造的に思考・判断・表現するスキルの向上を目指すものであり、結果として、課題解決の学習場面がより向上し、深い学びを作って、より多くのスキルを身に付けることを期待するものである。

具体的には、A 生徒が条件の下で課題を設定→B 情報収集→C整理と分析→D発表と交流→Eまとめ→F 新たな課題という過程で生徒が学ぶことである。研究を進めるうちに、「A 生徒が条件の下で課題を設定」を単元構成に仕組むのは、学習の方向性が変わる可能性があり、時間を多く割く必要が生じたので、単元において探究的な学習過程のうち、「なるべく多くのプロセスを使う」という条件にして、そのかわり探究的学習活動の練習課題を各教科で数を増やし、日常的に行うという現実的な解決策を講じた。<sup>6)</sup>

「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」によると、総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力のうち、知識・技能は探究的な学習を通して事実に基づく知識から概念的な知識へと高まっていくとされている。<sup>7)</sup>

以上のことから、本校においては、探究的な学習によって生徒が知識の概念的な理解を深めていくことができるように、教科の本質に迫るような問いを教師が立て、それを単元のゴールとして取り組む方法で授業改善を進めた。

これは、探究的な学習を通して、教科の見方・考え方をどう育てるのか、生徒が授業を通して学んだことをどのように「概念的な理解」にとらえ直していくのかという課題に対する一つの対応策だと考えている。

また、前述の通り、本年度は研究主題に基づいて「グローバル社会に生きてはたらく15の資質・能力」を定義した。各教科においても、「15の資質・能力」を育成するに資する授業改善に取り組んでお

<b>学校教育目標</b> 1 自他の人格を尊重し、連携協力し合える人間に 2 創意性・知性と正しい判断力をもつ人間に 3 自然と文化を愛する心豊かな人間に 4 課題を克服し、自ら開拓しようとする人間に 5 国際性理解を立ち、国と郷土を築く人間に	<b>グローバル社会に生きてはたらく力</b>		
	多様性を尊重する	柔軟な見方・考え方	協調・協働する力
	幅広く教養を身に付けようとする	多角的な見方・考え方	論理的に発言する力
	国・郷土を愛する	国・郷土の文化・自然を愛する	魅力を発見する力
	粘り強く取り組む態度	情報を収集・整理する力	課題発見・解決力
自分として物事をとらえる	地球規模で物事を見る	新しい価値を創出する力	

**★どのような手立て・指導上の工夫で迫るか**

自然科学、とりわけ昆虫を話題にした説明的文章（「クマゼミ増加の原因を探る」沼田英治）と文学的文章の特徴も備えた記録・報告文（「昆虫記」ジャン＝アンリ＝ファーブル）とを読み比べ、その違いをとらえ、「昆虫記」の一節を説明的文章の形式にリライトすることを学習活動のゴールとする。また、文章を読み比べ、リライトする経験を通して学んだことをもとに、文章の形式の違いと読者の考えの形成にはどのような関連があるのかということについて自分の考えをまとめることを単元のゴールとして取り組む。

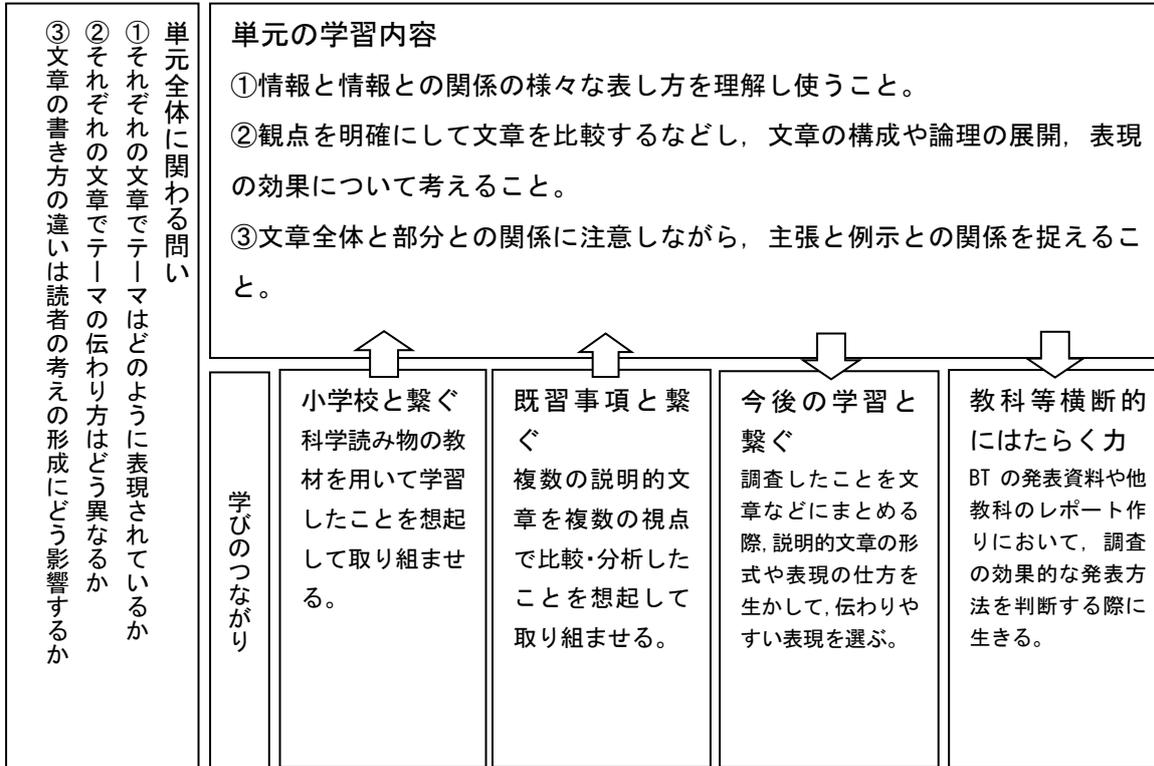


図4 単元構想図（国語科）

り、生徒がそれら資質・能力をとらえ直し、生きてはたらく力として身に付けることを期して、資質・能力に注目したカリマネにも取り組んでいる。

教科の授業においては、教科の本質に迫る問いを教師が設定し、それに迫る手立てを講じなければならないが、同時に、育成したい「15の資質・能力」に迫る手立てや工夫も求められる。「問い」と「資質・能力」の両者を関連づけて指導にあたるうえで、これを明確に示すことをルールに授業改善に取り組んだ。

以上のことは、（図4）に示したように、「単元

構想表」に全てまとめて示し、授業研究を深めることに役立てた。

おわりに

**(1) 本研究の意義**

探究的な学習を通して知識の概念的な理解を生む方策として「教科の本質に迫る問い」を立て、校内研究会ではその是非を議論することができた。今後、問いを立てることさえも生徒が協働的に取り組むことができるように研究と実践を積み重ねていかなければなるまいが、その歩みを一つ、進めることができた。

トピックに注目したカリマネに取り組む学校園は多いと思われるが、「資質・能力」に注目したカリマネに取り組んでいる学校はそう多くはない。その効果の検証は次年度に取り組まねばならない課題として残ったが、教師集団が互いに情報を共有しながら生徒の資質・能力を育むためのノウハウを構築していくことができれば、提案するに値する価値を生むのではないかと考えている。

また、一部の教科任せになりがちな「国際教育」を、「資質・能力を育てる」という形に置き換えることで、教師全員で取り組む枠組みを作ることができた。

## (2) 展望

探究的な学習において、生徒が条件の下で課題を設定することが難題であり、本年度の研究も、教科の本質に迫る問いは教師が立てるものとして研究を進めた。しかし、今後、新たなもの、考え、方法、価値などを生み出していくことが求められる生徒たちにとっては、限られた情報をもとに全体像をとらえたり、問題意識を持ったりすることのできる力が必要だと考えている。

そのためには、協働的に取り組みながら自ら課題を設定する力を付けてやることは我々の使命であると考えている。その方法を探り、具体的な教育実践を積み重ねていく必要があると考えている。

本年度は、「グローバル社会に生きてはたらく資質・能力」を身に付けさせることと、「教科の本質に迫る問い」をもとに探究的に学ぶことに並行して取り組んだので、両者を関連付ける「指導上の手立てや工夫」を必要としたが、「資質・能力」は、課題解決のために必要な力なのか、単元で身に付けさせる「ゴール」なのか、扱いが安定しなかった。研究をさらに進めていく際には、このあたりの整理が必要だろうと考えている。

各論に詳しいが、BT では生徒がグループでの調査研究の結果を SDGs のゴールと関連付け、各教科においてもグローバルな視点で教材を選び、もしくは開発するなど、グローバルな文脈を意識した取り組みが増えたが、生徒の意識は大きく変化したわけではない。それは、一つにグローバルな局面で身に付けた力を発揮するような場面の設定が乏しかったことにあるのではないかと考えている。

世界的な COVID-19 拡大により、人と直接出会う場面は限りなく少なくなったが、オンラインの交流は盛んに行われるようになった。このことを前向きにとらえ、生徒が身に付けた「資質・能力」をグローバルな局面で発揮し、振り返りながらさらに力を身に付けていくことのできる場面を増やす必要がある

と痛感している。

## 注

- 1) 「グローバル化時代の国際教育のあり方国際比較調査」、国立教育政策研究所・国際協力機構、2014. 3
- 2) 「中学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説 総則編」、文部科学省、2017. 7
- 3) 七里広志、「調査研究型の総合学習が卒業後に与える成果に関する、卒業生への世代追跡調査」、科研費奨励研究 17H00052、2017
- 4) 「初等中等教育における国際教育推進検討会報告－国際社会を生きる人材を育成するために－第 2 章 国際教育を取り巻く現状と課題(1) 授業実践という観点から」中央教育審議会初等中等教育分科会、2005. 8
- 5) 「滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要 62 集」滋賀大学教育学部附属中学校、2020. 3
- 6) 「滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要 60 集」滋賀大学教育学部附属中学校、2018. 3
- 7) 「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」より「2. 育成を目指す資質・能力を踏まえた教科等目標と評価の在り方」2016. 8